

急転するシリア情勢の未来

朝日カルチャーセンター・新宿教室

2025年4月8日

若林 啓史



写真 シリアから見た「ジャバル・アッシャイフ」（ヘルモン山） 2011年2月19日・講師撮影

アラビア語「ジャバル・アッシャイフ」は、直訳すると「長老の山」、アンチレバノン山脈の南端に位置する。海拔2814メートルの頂上は、シリアとレバノンの国境を画し、シリアで最も標高の高い地点である。「ヘルモン」は、アラビア語「ハラーム」（禁忌）と共通の語根を持つセム系単語で、ユダヤ教聖典にも言及がある。2024年12月8日、シリアでバアス党政権が崩壊するとイスラエル軍はゴラン高原の占領地を拡大、同日、ヘルモン山頂上を占拠した

はじめに

2024年11月末、シリア北西部のイドリブ県で政府軍に包囲されていた反体制武装組織「シャーム解放機構」は、突如攻勢を開始、地方都市を破竹の勢いで支配下に置きました。12月8日、「シャーム解放機構」を中心とする反体制勢力は、首都ダマスカスに到達し、バッシヤール・アルアサド大統領はロシアに出国しました。シリアの新政権造りは、着々と進んでいるように見えますが、宗派・民族が複雑なシリアの社会を統合できるか、予断を許しません。シリアの体制変換に至った背景と、今後の見通しについて分析します。

1 シリアの主要産業は政治

(1) シリアの成り立ち

- 「シリア」という言葉は元来、地中海東端の沿岸、すなわちエジプト、アナトリア高原（現在のトルコ）、イラク、ヒジャーズ地方（アラビア半島西部）で囲まれた地方を指します。この意味での「シリア」は、現在の「シリア共和国」と区別する意味で、「歴史的シリア」と呼ばれ、アラビア語では「シャーム」地方といいます
- 「歴史的シリア」は、古代オリエント時代より、周囲の強国の争奪の的となりました。諸王朝の興亡を経て、「歴史的シリア」には様々な民族・宗教・言語が盛衰しました。一方で新しい王朝に征服された民は、少数派として山岳地帯などに温存され、「歴史的シリア」には多数の民族・宗教・言語共同体から成る複雑な社会が形成されました
- 「歴史的シリア」を領有していたオスマン帝国が第一次世界大戦に敗れ解体すると、「歴史的シリア」は英仏間で二分割され、さらに英委任統治領はパレスティナとトランスヨルダン（現在のヨルダン）に、仏委任統治領は「シリア」とレバノンに再分割されました

(2) アラブ・ナショナリズムの主導権争い

- シリアは、エジプトと共に、アラブ世界の中では早くから欧州列強の干渉にさらされました。19世紀に入ると、ナポレオンがエジプトに遠征し、一時シリアに進軍しました。ナポレオン軍と接触したシリアの人びとは、西洋思想の書物をアラビア語に翻訳しました
- 19世紀、オスマン帝国の衰退は加速、エジプトは事実上、自立した政権が支配しました。オスマン帝国時代末期、シリアでは、アラブ地域独立を視野に、ナショナリズムが芽生えました。思想家の間には、シリアの複雑な社会を統合するため、宗教を政治に持ち込まない世俗的ナショナリズムを唱える者と、イスラームを近代化して政治・社会の根幹に据えようとする者の二潮流が生じました
- 第二次世界大戦後のアラブ諸国では、1952年のエジプト革命を典型として、ナショナリズムに覚醒した軍人が政権を担うようになりました。彼らは、世俗的ナショナリズムを民族解放運動と結びつけ、体制イデオロギーにしました。これに対し、ムスリム同胞団などイスラーム回帰主義者は、草の根の反体制運動を組織し、軍事政権に対抗しました
- また、アラブ諸国相互間においても、エジプト、シリア、イラクなどは、アラブ・ナショナリズムの主導権を巡って合従連衡の華々しい外交戦を繰り広げました

(3) バアス党政権の性格

- 1930年代初頭にフランスに留学していた三人のシリア出身者は、西洋哲学や日独伊の近代化を研究、イタリア統一運動に範を取って「バアス」（復興）主義を編み出しました
- 彼らの思想は、急進的アラブ・ナショナリズムの理論的骨格となりました。三人は帰国後合流し、「アラブ・バアス党」を創設しました
- バアス党は、第二次世界大戦後のシリアで、新興勢力として抬頭しました。1956年、バアス党創設者の一人が外務大臣に任命され、初めて同党は政権に参画しました
- 1963年、イラクとシリアのバアス党は、相次いでクーデターを起こし、政権を獲得しました。シリアのバアス党では、創設者の追放や指導部の内紛を経て、1970年、少数宗派であるアラウィー派出身のハーフェズ・アルアサドが権力を握りました

2 「アラブの春」の虚像

(1) シリア政界の基本構造

- 1958～1961年、エジプトとシリアは統一に合意し、アラブ連合共和国を形成しました。両国の統一は短時間で解消しましたが、その後のシリアの政治に大きな影響を残しました
- すなわち、エジプトのナーセル政権と、これに対抗するムスリム同胞団の対立構造が、シリアに移入され、定着しました。1963年のクーデター以後2024年まで、バアス党は世俗的ナショナリズムを掲げる軍事政権の母体となり、シリアの多様な社会を強力に統合しました。一方シリアのムスリム同胞団は、イスラーム回帰を目標にし、武力に訴えてでも、世俗主義政権を倒そうとしました。1964年、ムスリム同胞団は非合法化されました
- 1964年と1981-82年、ムスリム同胞団による武装蜂起が発生しました。特に1981-82年の反乱鎮圧に際しては、少なからぬ犠牲者が出ました。当時欧米は、イスラエルとの和平に反対するバアス党政権の弱体化を狙い、政権の残虐性を宣伝し同胞団を擁護しました

(2) 欧米の「ハイブリッド戦争」

- 2011年からアラブ世界を揺るがせた「アラブの春」は、一般に信じられているような自由や民主化を求める若者たちの反乱ではなく、東欧革命の再現を試みる欧米や、アラブ諸国のムスリム同胞団を通じて影響力を行使しようとしたカタルなどにより、情報通信技術を活用して煽動された政治現象であったとみるべきでしょう
- 例えば英国防省は2010年、『戦略情勢構想』を公表、特殊部隊の極秘作戦、地域の代理武装勢力、情報・心理戦争の三本柱を駆使し、表面的には部外者の立場から、他国の政権を倒す戦略を練りました。イギリス情報機関は、国内外のイスラーム急進主義者を管理下に置き、紛争地帯に投入する「女王陛下のジハーディスト」を養成しました
- 「アラブの春」の混乱が拡大すると、欧米は、長らく反抗的であったシリアとリビアの政権を倒そうとしました。「自由を求めるシリアの抗議運動」は、情報・心理戦争が生み出した虚構でした。シリアで実際に武器を執って政権に立ち向かったのは、復讐の機会を窺ってきたムスリム同胞団など、イスラームを掲げる職業的活動家たちでした

(3) 「シャーム解放機構」とは何か

- 2024年末にバアス党政権を倒すに至った「シャーム解放機構」は、カーイダ組織や「イスラーム国」の分枝である「ヌスラ戦線」が改名した武装集団です
- ヌスラ戦線は、「アラブの春」の混迷の中から出現しました。2011年夏、「イラク・イスラーム国」の指導者は、シリア出身のジャウラーニー（最近「シャラア」と名乗る）に、イラク・イスラーム国のシリア進出を準備するよう命じました。ジャウラーニーは、2012年1月、ヌスラ戦線を旗挙げしました
- ヌスラ戦線は、カタルなどからの武器供給と大都市での自爆攻撃戦術により急速に伸張り、トルコ国境からアレッポ周辺まで占拠しました。2012年、米政府はヌスラ戦線をテロリスト団体に指定しました。イラク・イスラーム国は2013年、ヌスラ戦線を合併、「イラクおよびシャームのイスラーム国」(ISIS)の樹立を宣言しました。ジャウラーニーはこの決定に納得せず、カーイダ組織に裁定を求め、合併撤回の指示を得ました。これが発端となり、「イスラーム国」とカーイダ組織の関係は断絶しました

3 バアス党政権崩壊

(1) 変転するシリア情勢

- 「アラブの春」がシリアに波及すると、ムスリム同胞団系の武装勢力やヌスラ戦線は、ダマスカス北東郊外の「東ゲータ」地区に浸透、首都を窺う勢いを示しました
- シリア政府軍は2013年4月、東ゲータ地区の包囲を開始しました。2018年春、政府軍は包囲を狭め、反体制武装組織は、東ゲータ地区の明け渡しとトルコ国境に接するイドリブ県への移動に合意しました
- ヌスラ戦線は2013年、イスラーム国と対立してカーイダ組織への直属を宣言、さらに2016年、ヌスラ戦線はカーイダ組織からも独立して「シャーム征服戦線」と改称しました。シャーム征服戦線は2017年、他の武装組織と合併して「シャーム解放機構」を名乗りました。シャーム解放機構の勢力は、イドリブ県に結集しました
- 2018年8月、政府軍はイドリブ県を包囲して砲撃を加え、武装勢力に投降を促しました。また、同年9月、ロシア軍はイドリブ県に大規模な爆撃を加えました。ロシアとトルコの大統領は同月会談、イドリブ県における非武装地帯の設置に合意しました。しかし戦闘は再燃、2019-20年、政府軍は再度イドリブ県を攻撃しました。2020年3月、ロシアとトルコの大統領は改めて会談、イドリブ県における停戦に合意しました
- 2023年2月、トルコ・シリア国境付近で大地震が発生しました。政府軍に追い詰められていたシャーム解放機構は、自然災害により大きな被害を蒙りました

(2) イスラエルとヒズボッラーの衝突

- 2024年のレバノン情勢の急変は、シリアにおける政変の序幕となりました
- 2023年10月7日、ハマースがイスラエルに対する奇襲を開始すると、ヒズボッラーはその翌日、イスラエルへのミサイル攻撃を開始しました。空爆とミサイル、ドローン攻撃による応酬で、イスラエル北部の約10万人の住民が避難しました
- ガザ地域の停戦に展望は開けず、イスラエルはヒズボッラーに矛先を転じました。2024年9月、イスラエル情報機関は、ヒズボッラー要員らの通信機器を遠隔操作で一斉に爆破しました。イスラエル軍は、ヒズボッラー本部を爆撃しナスラッター書記長を殺害、6日後に後継候補を殺害しました。イスラエル軍地上部隊は、レバノン領に侵攻しました
- イスラエル地上部隊は、11月26日にはリタニ川に到達しました。その翌日、米仏の仲介によるイスラエルとレバノン両政府の60日間の停戦合意が発効しました

(3) シャーム解放機構の南下

- レバノンで停戦合意が発効した11月27日、それまで壊滅寸前を装っていたシャーム解放機構は、突如政府軍に対する攻勢を開始、南下を始めました
- シャーム解放機構は、ドローンやミサイルで政府軍を圧倒、地方都市を次々と支配下に収め、12月8日、ダマスカスを占拠しました。同日、バッシャル・アルアサド大統領は空路で首都を脱出、ラタキア近くのロシア軍基地を經由し、ロシアに出国しました
- シリア南部を拠点としていたムスリム同胞団系武装勢力は、呼応して首都に入りました
- シャーム解放機構の劇的な勝利は、それまで数年間にわたり、イドリブ県で独自に製造していた高性能兵器の成果とされます。トルコやカタールなどの支援が疑われます

4 シリアの今後

(1) 新体制への移行

- シリアのバアス党政権が崩壊すると、欧米・トルコ・湾岸アラブ諸国など、つまり露中・イラン以外の国々のメディアは、シリアに自由が戻ったと政変を歓迎しました。これは、シャーム解放機構中心の政権樹立そのものを歓迎したというより、国際社会の二極分断の下、ロシアやイランの失点となる出来事への喜びを表現したのでしょう。一方、トランプ次期大統領（当時）は、政変が「トルコによる敵対的買収」との認識を示しました
- 政権崩壊後、政治犯虐待など、旧体制の残虐性を強調する報道が溢れました。しかし、「サイドナーヤー監獄」の政治犯解放の映像は演出であったことが露見、地下10階に及ぶと伝えられた拘禁施設は発見されず、新政権支持に誘導する宣伝と解釈可能です
- シャーム解放機構は、イドリブ県にシリア人実務家から成る行政部門を作っていました。この行政部門は首都に移動、2024年12月10日、暫定内閣を組織しました。政権の受け皿をあらかじめ準備していた点は、他の反体制武装組織と異なっていました
- 2025年1月29日、シャーム解放機構のシャラア指導者が暫定大統領就任と発表されました。シャラア暫定大統領は、自らの任期を新憲法制定までと明言する一方、それには3年が必要と語りました。当初3月1日までとされた暫定内閣は、そのまま続いています

(2) 見せかけの平和

- バアス党政権崩壊以来、新体制は着実に地歩を固めているように見えます。しかしそれは、ジハード主義者「ジャウラーニー」が「シャラア」と呼び名を改め、背広・ネクタイ着用で穏健化をアピールしているのと同様、シリア反体制勢力や支援国が得意としてきたプロパガンダによる虚像でしょう。彼が創設したヌスラ戦線の構成員は、過激思想を信奉し、少なくともその3割は、非シリア出身の戦士たちです。ヌスラ戦線は、自爆による無差別殺人やサリン製造で恐れられ、カーイダ組織から独立したと主張するまでは、占拠地の住民への苛酷な支配で知られていました
- 見せかけの平和の反面で、イスラエルは混乱に乗じてゴラン高原の占領地を拡大、さらにはシリア南部のドルーズ派を保護する名目で、支配領域の拡大を図ります。また、トルコが支援する、シリア北部の武装勢力は、政変後もシリア北東部のクルド人と戦っています。アメリカとイスラエルはクルド人を支援し、トルコを牽制しています。シリアのレバノン国境では、バアス党残党あるいは密輸組織といわれる勢力が、シャーム解放機構を攻撃しました。イラク国境付近では、イスラーム国が勢力回復中と伝えられます

(3) シリアの将来

- シャラア指導者は、権力掌握直後、少数宗派の保護、旧政権関係者への報復禁止、女性への「ヒジャーブ」着用強制の禁止など、寛容な政策を打ち出しました。しかし、イスラーム改宗の呼び掛けや、女性の服装への干渉など、禁令違反が報告されています
- 整然とした政権移行は、ダマスカスの内側だけで、シリア各地方では混乱が拡大しています。シャラア暫定大統領は、シリアの全武装勢力は武器を置き、国軍に統合されると言明しました。しかしこの決定も、国際社会向けの虚像形成と言わざるを得ません
- 今後、何らかのきっかけで、シリア全体が大規模な内乱状態に陥る危険があります

中東地図



シリア地図 (2025年1月22日現在)

